

【コメント 1】

栗本 夏樹 KURIMOTO Natsuki

京都市立芸術大学美術学部

ただいま司会者の方から御紹介にあずかりました栗本です。私は京都市立芸術大学で漆藝を教えており、また、このシンポジウムを企画した共同研究のメンバーでもあります。

ただいまクリフトン・モンティスさんの「文化交流の現在を司る“使節”としての日本の伝統工芸：ある工芸家の遭遇の経緯から」と題したお話を伺いながら、人と人との出会いや繋がり不思議さを深く感じていました。また、アメリカでクリフトンさんを中心に広がり始めている漆文化のネットワークの成立に私自身が参加できたことをとても嬉しく光栄に感じています。

クリフトンさんのお話にもありましたが、彼は1994年に日米芸術家交換計画フェローに選ばれ、日本に半年間滞在しました。その時、木工に和紙を取り入れて柿渋を塗る方法を始めています。漆にも興味を持ち帰国の少し前に京都市立芸術大学の私の研究室(漆工)を訪れました。その後、1999年3月から9月までの半年間、国際交流基金のアーティスト・フェローシップに選ばれ再来日し、京都市立芸術大学の客員研究員として、漆工研究室で漆芸技法を学びました。

ここで少し私共の大学の客員研究員制度について説明したいと思います。京都市立芸術大学は市立の大学でそんなに予算がありませんので客員研究員の方々にお給料を支払っているわけではありません。滞在費に関しては、ご自身で何か奨学金を取得していただくようお願いしています。そして普通の留学生と違う点は、学者やアーティストとしてプロフェッショナルな業績をお持ちになる方に客員研究員のポジションが与えられる点です。クリフトンさんのお話の中にも確か“エクスチェンジ”という言葉が使われたと思いますが、客員研究員の方々のキャリアと大学の教員や学生の知識や技術を交換しあうことが最大の目的です。クリフトンさんは私達から漆藝の知識や技術を学びましたが、私達は彼の仕事ぶりや新しいアイデアやセンス、生き方から多くのことを学び大きな影響を受けました。学生達にとっては、日本の大学で学びながら異文化体験できるのですから駅前留学ならぬ学内留学のような体験でした。

さて、そろそろ私の質問を始めたいと思います。今日の午前中の最初の発表者はイザベル・エムリクさんの「日欧の漆工芸、その今日と明日」でした。実は、今回のシンポジウムで漆藝に関してフランスとアメリカからお二人の発表者をお招きしたのは、日本を軸としてフランスとアメリカの漆藝を取巻く状況を相対化する狙いがありました。私は午前中、イザベル・エムリクさんのご発表の討論者として少しセンシティブな質問をしました。すなわちLAC (Lacquers Association for the Creation) のメンバーは、大きく分けて三つのタイプの作家に区別でき、漆で作品を作る人達、ジャパニングの技術や素材で制作する

人達、ポリウレタンなどの現代の素材で制作する人達がいるが、お互いの違いをどのように認識し受け入れているのか？という質問でした。

その問いに対するイザベルさんのお答えはとても鮮やかでした。「私達にとって素材の違いはそんなに大きな問題ではありません。一番大切なことは、“心の中に何を持っているか”ということです。そのことを伝えたいという気持ちと真実を述べるということが最も重要です。私達 LAC のメンバーはみんなラッカー・ウェアのアーティストです。素材やテクニックはそんなに重要ではありません。」日本人の私達ではこのようになかなか割り切れませんが、“目からウロコが落ちる” 気持ちがありました。ただフランスやヨーロッパでの漆文化の受容の長い歴史を経た境地ともいえる発言だったと思います。

質問の前置きが長くなりましたが、アメリカの漆藝を取巻く状況はここ十年で急速に展開しています。そしてクリフトンさんのお話で紹介されたようにアメリカで漆に興味を持つ人々に共通する点は自然素材としての漆への興味です。クリフトンさん自身の制作のこだわりは“自然素材のみで作っている” ことだとお話がありましたし、漆という自然素材から「自然自体をわすれてはならない」というメッセージを感じるという発言もありました。ここであらためて自然素材である漆や漆藝の可能性についてアメリカの中でどのような実感をお持ちかお聞かせ下さい。

<クリフトン・モンティスさんのお答え>

私の住んでいるミシガン州のトラバスシティにあるノースウェスタン・ミシガン大学の美術館で2年前に日本の美術工芸を紹介する展覧会がありました。栗本先生も出品作家の一人でしたが、私も漆藝に関するワークショップを行ないました。アメリカでも田舎の人々が日本の漆藝に興味を持つか心配でしたが、ふたを開けてみると85名もの参加者があり大盛況でした。特に、アメリカの若い人達が漆に大変興味を持っています。日本の伝統的な漆藝作品のことは何も知らない人々です。私はこのような若者たちに漆の情報を提供するためにインターネットを使っています。アメリカ中の人々とつながるインターネットによるネットワークです。わたしはこれをインターネット・ワークショップ（工房）と呼んでいます。

また、ニューヨークにあるミュージアムオブ アーツ&デザイン（旧クラフトミュージアム）は現在、改装中ですが、新しくなる美術館の最初の展覧会として“自然素材（オーガニック）を使った作品の展覧会” を計画中です。そして企画しているキュレーターはすでに日本のコンテンポラリーな漆作家にコンタクトを取り始めています。また、今日、発表の中でも紹介しましたが、インディアナ・ポリスに住む私の友人のナット・トランさんは、インディアナ・ポリス国際空港のためのアートワークのコンペティションで選ばれ13メートルの壁面のための漆造形作品を制作する予定です。インディアナ州だけでなくカリフォルニアやサンディエゴでも漆のアーティストが活躍しています。アメリカだけでなくカナダでもそうです。いろんなことが起こっています。どこから来てどこに向かうのか？アウトサイダーはいません。とても可能性を秘めた状況であることは間違いありません。

ん。

<コメント>

木村法光：私はもともと栗本先生と同じ京都市立芸術大学の漆工専攻で漆藝を学びました。栗本さんの少し（だいぶ？）先輩です。大学を卒業してから奈良の正倉院事務所に務めましたので、それから研究者として漆の調査・研究にずっとたずさわってきました。正倉院事務所を定年でやめたあと京都市立芸術大学で教鞭を取りましたが、今はそれも退任して九州で暮しています。私は多くの正倉院宝物の修理や復元に関わりましたが、多くの熟練の工人と出会いました。彼らとの共同作業の中から多くのことを学びました。是非、クリフトンさんにもそういう職人や工人から学んでいただきたいと思います。見せていただいた作品写真の中で、フェルトを漆で固めた茶碗がでてきましたが、その作り方をもう一度教えて下さい。

クリフトン：あのお碗の制作は試行錯誤しながら作りましたので完成まで3年の歳月が必要でした。基本的には乾漆の技法と同じですが、フェルトの内側だけの片側だけの作業です。表面のフェルトを汚さず制作するのに大変苦労しました。

モーガン・ピテルカ：私はあなたの発表から実に多くのインスピレーションを得ました。ありがとうございました。私が質問したいのは、日本の伝統的な分野の芸術家は、外国人の伝統分野での新しい取り組みを脅威に感じる場合が多いように感じています。私はそれらの取り組みは新しい可能性を高めるものだと思いますが、あなたはどう思いますか？

クリフトン：とても不思議なことですが、私は一度もそのような対応を受けたことはありません。もし、あったとしても受け入れることができますと思います。また、私の次の世代の人達には、そのような心配は必要ないと思います。若い世代の人達は多くの言語も学んでいてグローバルな考え方を身に付けています。日本に限らず、世界中でそのような変化が起こっていると感じます。

味岡千晶：シドニーで日本の文化庁主催の「四季」展を開催したことがあります。ミュージアムショップで着物の展示販売もしました。マネキンに肌襦袢を着せてその上に着物の帯をしめました。その展覧会を見に来た日本人の多くが「肌襦袢に直接帯びをしめて見せるのはいかがなものか？」とクレームつけました。私はその時、どうして日本人は外国人に味方や楽しみ方まで押し付けるのだろうか？と疑問に思いました。本物に対するこだわりも大切だが、もっと広い心で対応したほうが可能性が広がると思います。